情緒障害児の分類とその治療の研究

——落ち着きのない子——

研究第6部　森脇　要、権平　俊子
佐野良五郎、野田　雅子
金子　一宏、飯尾　敦子
研究第5部　望月　武子

I　序

教育相談の窓口から見て、子どもの落ち着きのなさに対する訴えが割合に多いことに気づく。家庭で気づかれる場合もあり、幼稚園や小学校に入学してから気づかれる場合もある。また、母親や幼稚園などで「落ち着きがない」と言われる時、この言葉で表現される内容は必ずしも同じではない。母親の訴えの内容は、よく動き廻り、興味が一つのことに長続きせず、また、何か教えようとすると逃げ出す、というなことであり、幼稚園や学校の訴えの内容は、大体集団行動がとれず、勝手な行動をするというような事である。

このように、落ち着きのないことの理解が必ずしも同じでないので、我々は研究に先立って一応その定義をしておくことが、混乱を避けるためには必要であると考え、次のように定義した。即ち、「落ち着きがない」というのは、「置かれた場面の要求に適応することができないで、身体を動かしたり、動き廻ったりし、場面とは関係のうすい勝手な行動をすることである」と、以上のように定義した。

II　臨床類型の設定

次に、我々の過去の臨床的経験をして、「落ち着きのない」行動を、まずいくつかのタイプに分けることにし、多くの討議を重ねた結果、以下の9つの類型を得た。

(1)　分離不安型

母親から離れると、不安になって落ち着いて行動ができない。母親が同室すると落ち着いた行動になる。

(2)　失敗不安型

子ども自身が、過去に失敗した事柄や、自信のない事態や課題に直面したとき、落ち着きがなくなる。例えば、洋服をいじったり、ソワソワし、課題を解決しようと努力せず、場面から逃げたがる。

(3)　嫉妬型

幼稚園場面で、先生が他の子と親しくしていたり、また、母親が赤ちゃんの世話をしていたりすると、それが気になって、課題行動を落ち着いてやっていられない。

(4)　能力課題不一致型

子どもの能力に合わない課題を与えられると、それに応じないで、すぐ「知らない」と言ったり、関係のない話をもち出したりし、勝手な行動をとり始め、ふらふらする。現実逃避的である。

(5)　圧力型

先生や母親などが、強く圧力をかけていると、落ち着いて課題行動をするが、この圧力がゆるんだり、無くなったりすると、勝手な行動をする。例えば、非常に厳しい母親に育てられた子が、幼稚園などで、大あばれをして落ち着かないのは、この子を圧える圧力がなくなったからであると考える。

(6)　自己顕示型

人の注意を惹こうとして、その場にそぐわない行動をし、落ち着いて課題行動をせず、集団生活で奇声をあげたり、突び出して滑稽な行動をしたり、あるいは他の子をいじめたり、制作品を壊したり、等の妨害的、破壊的行動をする。

(7)　関心要求型

大人の関心が得られ、大人からの働きかけがあると落

ち着いて課題や遊びを続けることができるが、大人の関心が得られないと落ち着かなくなる。大人の関心を求めることも多い。しかし、顕示型のように、自分を目立たせて、大人の関心を惹こうとしない。自己顕示型の子は、非社会的あるいは反社会的行動によって自分を目立たせ、大人の注意を惹こうとするが、このタイプには、これはない。

(8) 他関心型

他に気になることや心配事があって、落ち着いていられない型。嫉妬型もこの変型と考えてよいかも知れない。テレビが気になって落ち着いてごはんを食べないとか、友人のことが気になって勉強も制作も出来ないというようなタイプである。

(9) 過剰運動型

いっ時も、じっとしていることができず、母親が気を許すと危険な子どもである。今までのタイプと違って、心理的あるいは環境的な原因ではなく、主としてその子の器質的欠陥によると考えられるものである。

以上の類型の分類の原理は必ずしも同じではなく、また、抽象の水準も同一ではない。理論的には必ずしもスッキリしないが、現状では、診断や治療のために一応の分類が必要なので、この分類を使うことにした。今後、具体的な事例を診断し、治療をしてゆく過程で不備な点は修正してゆきたいと考えている。

我々の類型の中で、現象面の特徴によったものは、分離不安型、自己顕示型、他関心型、過剰運動型の4つである。また、原因と考えられるものによって分類したものは、失敗不安型、嫉妬型、圧力型、関心要求型、能力課題不一致型の5つである。この類型の中で、能力課題不一致型は、自己顕示型や失敗不安型の原因となることが多いので、一つの類型とすることに少し躊躇したが、子どもの中には、課題と能力の不一致のために落ち着かなくなっていることは確かだが、自己顕示や失敗不安を示していないと思われる子どもがいるので、一応この類型も残すことにした。

また、これらの類型は相互排他的ではない。それ故、一人の子どもがこれらの類型を2つあるいはそれ以上もっていることもあり得るわけである。

Ⅲ　診　断

1. 仮説の設定

教養相談において、落ち着きのないことを訴えた事例を対象に研究を始めた。権平が再度これらの母親に面接し、子どもの生育史、落ち着きのない状況、親子関係、夫婦関係等、落ち着きのない状況に関係が深いと思われる情報を集めることに努めた。これらの情報や幼稚園や学校の報告、テスト場面における行動を参考にして、それぞれの子どもの落ち着きのない行動が、どの類型に一番近いかを討議して、一応仮説的に、1つあるいは2つの類型をそれぞれの子に当てはめた。

2. 観察実験

我々は、仮説を検証するために観察実験を始めた。実験者は金子である。尚、この行動はビデオにとり、後で全員討議の参考にした。それと同時に、観察室から飯尾もまた、子どもの行動を記録し、これも討議の貴重な材料になった。

金子は、この実験室で、できるだけ異ったいろいろな条件を作り出し、仮説の類型を確証する努力をした。例えば、子どもを一人にして自由に遊ばせることによって、落ち着きのない程度がどの程度かを見、これによって過剰運動型の子どもを発見しようとした。この型の子どもの中には、脳波異常がある場合もあるので、脳波検査も診断に欠かせないことの1つである。また、子ども一人にした時と、母親を同室させた時との行動の差によって（実験者が一緒に実験室にいる時と、母親と子どもだけにして実験者は観察室にいる時とがあったが）、分離不安型や圧力型を見出そうとした。また、実験者が子どもと親和的な態度を示し、常に子どもの相手になっている時と、背景に退いてしまって子どもに無関心な態度を示した時との行動の差を見ることによって、自己顕示型や関心要求型を見出そうとした。また、兄弟や友人を一緒に実験室に入れ、実験者が兄弟や友人と特に親しくした場合の被験者の行動の変化により、嫉妬型を見出し、あるいはまた、易しい課題を与えた時と、難かしい課題を与えた時の行動の差から失敗不安型を確かめようとした。1人の子どもについて、1回ないし2回の観察実験であったので、子どもは場面にも実験にもなれていないという不利な条件はあったが、金子が幼児をいつも扱っているためにラポールを作るのが上手で、この技術に助けられて、比較的この観察実験は成功であったように思う。

3. 診　断

類型の決定は、実験場面の条件だけでは決定できない

ことも多く、母親との面接から得た情報や、幼稚園や小学校からの報告をも参考にして、初めて類型決定が可能なこともあった。また、観察実験や、その他の情報だけでは、類型決定が難しく、心理治療の過程で初めて、類型が明らかになった場合もあった。

Ⅳ 治　　療

1. 治療原理

類型の決定により、我々は次のような治療原理をたてた。

(1) 分離不安型

まず、分離不安の原因を明らかにすることが必要である。a）母親の溺愛による独立心の欠除をその原因とするものもあり、b）母親の拒否による分離不安もあり、c）母親側の分離不安より起こる場合もある。（この間のメカニズムについては、日本総合愛育研究所紀要第2集（1966）P.141森脇他「登校拒否児」に詳しい）a）b）の場合は、母親の育児態度の変更が必要であるが、これはガイダンスにより育児知識を提供するだけで解決することもあり、また、カウンセリングによって親のパーソナリティや夫婦間の関係の改善が必要な場合もある。また、c）の場合は、母親自身のパーソナリティに問題の根源があるので、本人のカウンセリングは勿論、ケース・ワークの技術なども応用して、夫婦間の問題の解決にも努めなければならない。

(2) 失敗不安型

これは、度重なる失敗や、成功への強要によって引きおこされたのである。まず、親に、子どもの能力以上の課題や、その成功の強要をやめるように、その態度を改めさせなければならない。それだけでは十分でなくて、この子のパーソナリティがそこなわれているのだから、圧力や不安のない環境で、子どもが自発的に活動することを再学習する必要がある。子どもに対する非難や批判がなく、その失敗にもかかわらず、その人格が尊重される雰囲気においてのみ、この歪んだパーソナリティは改善されるであろう。これは心理治療によらねばならない。

(3) 嫉妬型

嫉妬心は親の扱い方によって生ずる。母親は次子に手がかかりすぎ、第一子の世話がおろそかになったり、嫉妬からくる子どもの要求や退行現象、即ち、べたべたし、次子と同じ玩具をほしがり、哺乳瓶をほしがり、あるいは夜尿を始めるなどの行為に正しい理解を示さず、ただ叱ることや罰することで解決しようとして更に嫉妬を起こさせることが多い。また、兄弟喧嘩の時、兄を主として叱るなども嫉妬の成立と関係がある。それに、親子の相性の問題もあり、同じ子どもでも相性のよい方を無意識に可愛がって、この原因を作っていることもある。

以上のような原因を除くことがまず考えられなければならないが、それだけではよくならず、心理治療で、この子ども達の不満を発散させ、自分のいろいろの欠陥にもかかわらず、自分が本当に愛されているという確信を持たせることが必要である。

(4) 能力課題不一致型

母親から、落ち着きがないという主訴の中で、能力課題不一致型、あるいはこのタイプが原因で失敗不安型や自己顕示型が案外多い。親が子どもの能力を、比較的正確に評価していることは少ない。そのために母親には子どもの能力の現状を知らせると共に、子どもの成長や学習に関する知識を与えて、子どもに対する無理な要求は、子どもに害を与えるだけであることを知らせる必要がある。しかし、子どもに過度の要求を出す母親には、劣等感が強く、また、夫に深い不満を持っているものが多いので母親のカウンセリングが大切である。

(5) 圧力型

子どもをコントロールする方法には、2つの方法がある。その1つは外側からコントロールする方法、もう1つは内側からコントロールする方法である。外側からのコントロールは、力で圧えつけ、環境に子どもを無理に一致させる。こういう子どもは、この1つの環境に一致して行動することは知っているが、環境が変わると、どう行動してよいかわからず、不適応行動を示し、何もしなかったり、勝手な事をしたりする。内側からのコントロールは、子どもの自発性による自己統制の能力を高めてゆく方法である。こうして育てられた子どもは、内側からの自己統制の能力が発達するまでは、途中で多くの試行錯誤があり、適応できない子に見えることもあるが、この能力を完成してからは、環境の変化に応じて適応してゆくことができる。ここで、圧力型の子どもは、内側からの自己統制の能力を発達させていない子どもである。従って、場面が変ると不適応になるのである。かかる子どもは、心理治療を行なうことによって、古い行動様式を排除し、内側からの自己による統制の能力を養

わなければならない。

(6) 自己顕示型

これは、何らかの劣等感、愛情不満をもっている子に表われる。それ故、母親の、その子の扱い方や、兄弟関係、友人関係を調整することが必要である。特に、自己顕示欲求を社会的な通路を通じて表現させ、この表現が周囲のものから認められることが大切である。それと共に、間違った認知を持っていることが多く、パーソナリティ自体の改善も必要であるので、心理治療が必要であり、多くは母親のカウンセリングも必要である。

(7) 関心要求型

この型の原因に関する1つの仮定は、この型の子が嫉妬型や自己顕示型の子と、いくらか共通の基盤をもっており、親に対して欲求不満をもっているために、愛情を満たしたい欲求によって支えられた行動形式であると思える。しかし、これと相反する作業仮定として、母親や祖父母が溺愛的で、いつも子どもに関心を示しているので、周囲の関心がなくなると、落ち着かなくなるということも考えられる。この仮定に立てば、このタイプの子どもがなぜ、自己顕示にならないかの理由が、比較的理解し易い。

将来の研究によって、原因に関するこの2つの作業仮定のうち、どちらかの仮定だけが正しいということになるかも知れないし、あるいは2つの原因についての仮定が、それぞれに正しい2つの新しい類型に分離することが必要になって来るかもしれない。

(8) 他関心型

この類型は、我々の類型の中で一番わかり難い型である。嫉妬心もその原因になると考えられるし、また、興味が急に多様化してくる2才前後の子どもによく見られるとすれば、（この点はまだ明確ではない）興味の急激な多様化がその原因で、強い新しい興味に惹かれて、現実の仕事を忘れるのかも知れない。発達的過程の特徴でないとすれば、その原因は今のところ明確ではない。

(9) 過剰運動型

医学的原因なので、投薬等の治療が必要であり、また、このタイプの子どもは大へん扱いにくく、二次的に情緒的な問題をひき起こし易いので、母親のカウセリングと子どもの心理治療も、併行して行なうことが必要と思われる。

V 事　例

事例Ⅰ　A・H（男）

観察時年令　3：11

<家族構成>父（37才）大学卒、会社員。母（28才）大学卒、弟（9ヵ月）。同棟の階下に、別世帯ではあるが母方祖父母が住んでいる。

<生育歴>予定日より2週間遅れ、吸引分娩、生下時体重3,700gで、切迫仮死はあったが健康状態に特に異常なし。栄養は母乳とミルクとの混合、1才時離乳。身体的発育は順調。既往症は、突発性発疹、水痘ぐらいだが怪我が多い。1才4ヵ月の時、フロ場ですべってころび、頭を打って3針ぬった。2才1ヵ月の時、階段から落ちて出血。レントゲン検査をしたが、結果は異常ナシ。また、2才4ヵ月の時、坐っていて後ろにそって倒れ、頭を打って2針ぬった。

<問題>S幼稚園の入園テストを受けた際、落ち着きがなく、自分勝手な行動をとったため、集団保育に向かないという理由で不合格になった。当所で行なった知能テストは、3才3ヵ月の時、保健指導部から廻って来た際、I・Q113、そして、この問題をもって来所した3才11ヵ月の時のI・Q 106、テスト中の行動は、共に、よくおしゃべりをし、問以外のことまで勝手にしゃべりながら課題に応じる。興味がいろいろに散って、落ち着きがないという観察である。

<母親との面接>友だち遊びは好きで、外に出ると周囲の友だちの年令が大きいため「お前はチビだ」と言われるが、ついて歩いている。また友だちに対しては気が弱いが自分の弟にだけは乱暴する。弟が生まれてからは、弟に対してやきもちをやき、それ迄できていたのにパンツも一人ではかなくなった。母は美術大卒で、仕事をしているわけではないが、制作が好きで、本児が小さい頃はずっと階下の祖母に本児のめんどうを見てもらっていた。父も母も感情的に叱るだけで、一貫した叱り方をしなかった。受験した幼稚園（S幼稚園の試験に落ちたので、K幼稚園に入った）では、落ち着きなく、知的発達の程度も遅れている、自己顕示が強い、と注意された。近くのH幼稚園を避けて、S幼稚園を選んだ理由として、母親は、H幼稚園に行っている子は、近くの子が多く、従って商店の子が多いので、本児の遊び友だちとしては適当でない。できれば避けたいと思っていたと述べ、そしてK幼稚園（少し離れた）を選び、入園させてもらった。

<類型仮説>1　自己顕示型。根拠：S幼稚園の教師から、自己顕示が強いと注意された。2　嫉妬型。根拠：弟誕生後、自立が失なわれ、退行現象が表われているこ

と。また、弟に対してやきもちをやき、意識的に乱暴する。また、このことの背景には、母親が、本児だけの時は階下の祖母に子どものめんどうを見てもらっていたが、やはり子どもが2人になると、2人共祖母に預けるわけにもいかないので、上の子は祖母に預け、下の子だけ自分で世話をしたとのべている。嫉妬型を推定するのに参考になるのではないかと思われる。

<観察実験結果>第1回の時は、特に計画をもたずに臨んだことと、実験者が適当な相手をしてやり、本児の期待どおりに動いてやったので、落ち着きのない状態は全く観察されなかった。また、同行して来た、母親、弟、祖母も同室したが、これといった変化は見られなかった。そこで第2回目の観察をし、次のような場面設定して本児の行動を見た。Ⅰ．本児と実験者のみの場面。この中で、a．親和的態度で接する。b．実験者が背景に退いて、本児と接触をもたないようにする。c．課題を与えてみる、という3つの場面を作った。また、Ⅱ．母親を同室させてⅠ．と同様のa、b、cの3場面を作った。その結果、どの場面でも非常によく遊んだが、課題場面では、それから逃げようとする態度が見られた。このことから、失敗不安症が考えられそうである。また、実験者が背景に退くと、実験者の注意を喚起しようとする行動がいろいろ見られ、(すべってころんで見せたり、オジサン、オジサンと呼んでみたり）また、観察場面とは別に、幼稚園の先生や母親が、本児を認めて受けいれてやると少し落ち着くという報告もあるので自己顕示型という仮説は支持される。嫉妬型については、第一回の観察実験で、母親が弟を抱いて入室しても行動に変化がないので否定された。

<処置および経過>本児の失敗不安や自己顕示型の原因としは、母親の本児に対する態度や取扱い方に問題があると考えられ、4回にわたってカウンセリングが行なわれた。この間の母親の内省や洞察は次の如くである。今まで本児の養育を祖母に頼っていて、自分から働きかけ、世話をすることが少なった。自分があまり子どもが好きでないために、子どもと接触をもたなければいけないと思いながらも、この子の相手をしていたらきりがないと思い、あまり相手になってやらなかった。地域的な本児の友人の環境、そこから来る子どもの要求を、親の考えだけで否定したこと、即ち本児が興味をもったり、欲しがったりする物、例えばピストルのお菓子などは、地域社会の中に生きている子どもとしては、こういうものを欲しがるのが当然であるのに自分（母親）が気に入らないからという理由で、拒否していた。こんな事は多った。――こうした多くの欲求抵抗が、本児の顕示欲求型の原因をなしていると思われる。

なお現在でも本児を幼稚園に送って来たのちに、母親がすぐに帰らないで幼稚園で他の母親と立話しなどしている姿を見かけると、「ママはどうして帰らないんだろう、早く帰ればいいのに……」と本児は自分の視界に母親がいつまでもいることを嫌がるそうである。これは母親の干渉をおそれてのことであるという。こうした事からも、この母親は愛情深くはないが、本児に比較的高い要求をもっており、不満型の母親であると思われる。カウンセリングを通じて、母親の洞察はすすんだ。理屈のよくわかる母親だけに、カウンセリングがすすむにつれて、子どもと接していく上で、理屈と本心との板ばさみになるようであった。人間の性格はそう容易には変わらないが、大分よく反省し、子どもの扱い方をよく考えるようになった。

母親の批判的、拒否的態度からきた失敗不安型も少なくない。母親に認められ、幼稚園で認められたので、自己顕示型も少なくなり、大分落ち着いてきたと報告されている。

<考察>はじめ、嫉妬型も考えたが弟誕生後に退行現象があり、弟にやきもちをやいて乱暴した。嫉妬心があることは確かであるが、落ち着きのなさとは結びつかないようである。

事例Ⅱ　A・T（男）

観察時年令　7才2カ月、区立小学校1年生。

<家族構成>父（38才）大学卒、会社員。母（32才）大学卒、別棟に父方祖父母（76才、68才）が住んでいる。

<生育歴>予定日より1日遅れただけの正常分娩。生下時体重3,280gで、健康状態は良好。人工栄養で、1才時離乳。身体的な発育（首のすわり、おすわりなど）は順調で、特に目立った病気もしていない。

<問題>5才11カ月の時、就学を前に知能テストを受けるために来所。I・Q．は110であるが、テスト中の態度は、非常に自信がなく、自分はバカだといったりする。また、問いには自信がないと答えないのに、検査者に対してはなれなれしく振舞い、落ち着きなく気が散って、問以外のことを、よくしゃべるテストには興味がなく、ふざけたりもする。

この後、7才1カ月の時、学校の担任教師から、教師の手をかけ、負担である。反抗的な態度を示すことがある。幼稚園で当然できていていい筈の身のまわりの始末などが身についていない、などの点を注意され、そのことで来所した。この時の知能テストの結果は、I・Q．101で、検査中の態度は、やはり自信がなく、解ってい

てもうまく表現できずに小声で言ってみたり、落ち着きなく体を動かしたりする。また、問い以外の事をよくしゃべる、ということである。

<母親との面接>学校では、34名のクラスだが、みんなのすることをキチンとできないで担任の手をやかせると言われる。また、授業中、自分に担任の注意が向いていないと奇声を発したり、キョロキョロしたり、私語が多くなったり、といった目立った行動をとる。これは、担任の注意をひいていたいからだと思われる。家でもソワソワしていて、客が来ると見に行ったりする。勉強に対して自信のない子で、母親が焦って「バカだ」と言いながら教えると、何とかやるという調子である。母親は子ども好きではないが、教育に関してはとても気になるという。

以上、来所時の主訴、知能テスト中の態度、母親との面接内容から、以下の仮説をもって観察することにした。

<類型仮説>1．自己顕示型。根拠：授業中、自分に注意が向けられていないと、奇声を発したり私語が多くなったり、目立った行動をする。2．失敗不安型。根拠：知能テスト中の態度で、自信がなかったりすると、ゴソゴソ体を動かしたり、問い以外のことをしゃべって課題から逃げようとする。

<観察実験結果>以上の仮説の下に、課題をいろいろ与えてみる、などの計画を立て、それに従って観察をした。その結果、課題に対してはよく応じ、楽しそうであった。ブロックを使っての制作で、自分の作品に、様々な形容詞をつけて誇らし気な態度が見られた（例えば、未来の建物、完全に高いビル、予想以上のビル、など）しかし、それが自己顕示と結びついているかどうかは不明である。また、実験者との競争場面では、年令的格差があるために自分が劣るのは当然と思っているらしく、実験者に対する競争心は見られず、従ってこの場面から自己顕示は見られなかった。更に、計算問題をさせてみると、自信が持てずに、1問1問、実験者の表情を見て確認を求めた。問題を見て、とっさに正しい答がいえていても、首をかしげたり他の答を言ってみたりして実験者の反応を見、最終的に答を出すまでに時間がかかる。ここからは類型仮説の失敗不安型が考えられる。

<処置及び経過>何故、この型が生まれたかということを考えてみると、母親との面接でわかったように、両親共、子どもがあまり好きでなく、めんどうである反面、教育的で、何でも評価するタイプのため、失敗不安型が生じたと考えられる。そこで処置としては、以上の点に関して母親と2回の面接をし、次のように指導した。本児の自信のなさ、（例えば、算数の問題など、できていても承認してもらわないと自信がない）に対しては、本児にできるもの、低いところから順に、できたことを認めてやり、力づけてやりながら、だんだん高い方へ持っていく、というような扱いをするようにと、具体的に例をあげながら説明した。その後、学校での様子を担任教師に問い合わせてみたところ、学校では、本児ができた時は認めてやったりすると、特に目立って困るということがなくなり、学校生活には大分、落ち着きが見られるようになったと見直している様子であった。また、母親もその為に、本児を見る気持ちに余裕がもてるようになり、子どもを受容し、情緒的に安定したと報告があった。こうして自己顕示的要求も少なくなってきた。

<考察>本児の落ち着きのない行動の原因としては、失敗不安を考えてよいと思う。更に家庭ではテキパキ行動できない自信のない子として、学校では、扱いにくい、手のかかる子として認知され、いつも認められていないために、自己顕示をして認められたい気持ちが、常にあったのではないか。それが、また、学校では奇声を発したり、私語が多くなったり、ということになったと考えられる。親や教師から認められていなかったこの子が、担任から認められるようになり、面接、指導をうけた母親が更に本児が担任から見直されたことで安心し、本児を認めるようになったことが、本児を安定させ、自己顕示する必要を失くさせた。母親が子どもの扱い方を改善したことによって、失敗不安といったものも失くなって来た。両方相まって、落ちつきが見られてきたものと考えられる。

事例Ⅲ　I・M（男）

観察時年令　4才6カ月

<家族構成>父（61才）大学卒、研究者（在宅）母（42才）大学卒、研究者。週2日、大学講師として出ている。姉（8才）区立小学校3年。姉（5才）私立幼稚園。

<生育歴>予定日より1週間遅い正常分娩。生下時体重3,880 g、健康状態に異常なし。混合栄養で1才時離乳。身体的発育は順調。ある病院の哺育室に1年間居り、その後現在のナースリールームに籍を置いている。2才6カ月の時水痘をやった他は、特に大きな病気もなく、体の発育も、ずっと順調である。

<問題>父親に対して反抗的であるということと、カ行が正しく発音できないということを主訴として来所。その4才4カ月の時、知能テストをしたところI・Q 108で、テスト中の態度は極く普通であったが、母親は姉と

一緒に来ていたために落ち着いてテストを受けず、そのため知能指数がよくなかったものと思われるから、もう一度やり直してほしいと要望したので、4才6カ月の時再テスト。I・Q 122、2回ともテスト場面にはやや緊張が見られ、落ち着いているが、相談室に母と同室すると、チョコチョコして落ち着かず、相談者のペンケースを放ったりして、テストの時とは全く違う態度であった。

<母親との面接>父親が、本児に対して昔風の男らしさを要求し、姉達には甘いが本児には非常に厳しく、叱ったり暴力をふるったりする。それも、ただ厳しいというのではなく、まるで同性に対する憎しみかと思われる程、拒否的な態度が感じられる。本児は、こうした父親に対して反抗的であるが、それが緊張の形になって表われ、自分をとざしてしまう。父親は50才まで独身で、自分の母親と手伝いの3人だけで生活していた。この母親が至れり尽せりの世話をやいてくれたのだ、父親には何の不自由も不満もなかった。この母親の死後、結婚し、妻である本児の母親にも自分の母親と同じ役割を要求し、かつ研究も中断することを許さなかったために、生まれて来た子ども達は3人共、病院の哺育室からナースリールームへと預けられてきた。家は非常に狭かった(36m²)が、家は寝る場所でしかないので、せまくてもどうにか間に合っていた。しかし、子ども達が大きくなるにつれて手狭になり、そのうちに父親が停年退職で名誉研究員として、家に研究場所が移った。このような物理的環境条件の悪さに加えて、父親が育ち盛りの子どものうるささに我慢がならないということがあって、子どもの方にかなりの制約、圧力がかかってくる結果となった。父親は、自分の年令の割に小さい子を持ったために、その点に無理があって、父親としての役割が十分にとれず、しかも我侭な性格をむき出しにするので、子ども達が犠牲になってしまっている。

本児は、その場の雰囲気や人の感情を汲みとるのが早く、相手を甘く見ると、どこまでも我侭ではしゃぎ、圧力を感じたりするとチンマリしてしまう。また、はしゃぐのは特に母親と一緒の時がひどく、おちつかなくなる。これは、いろいろな場所に連れ歩くことが非常に少なかったために、ちょっと珍しい所に行くとばかにはしゃぎすぎるのではないか、と母親は考えている。しかし、この母親は、子どもを躾ける態度はほとんどない。子どもが勝手な行動をして、他人に迷惑をかけても平気で、物を投げ、他人に当ると、相手にはあやまるが、子どもには全然注意せず、また、叱りもしない。これは、もともとの母親の態度か、あるいは父親が厳しするので母親がこういう態度になっているのかは明らかでないが、この母親の態度が、本児が母親と一緒だと一層我侭になり、落ち着きがなくなる理由であると思われる。

<類型仮説>圧力型。以上のような母親の話から、厳しい父親、狭い家、小さい時からの母親との接触の少なさなどによるフラストレーションが、父親の前では抑えられているが、父親がいないと爆発してばかはしゃぎすることになるのではないかと考えられる。

<観察実験結果>入室前、廊下で待っている時は、風呂敷を首に巻いてスーパーマンの真似をし、大声をあげたり、母親の禁止もきかずにゴミ箱の蓋をガタガタ言わせたり、エレベーターをいたずらしていたにもかかわらず、入室と同時にその元気は全く消えて、どんな場面を作っても緊張があり、落ち着きのない状態は全く観察されなかった。緊張はあるが課題にはちゃんと応じることができた。実験者が交替したり、途中で母親を同室させたり、母親と2人だけにしたりして場面を変化させてみたが、本児の行動、態度に変化は見られなかった。場面の読みがいいために場面を一種の〝勉強〟という雰囲気に感じとって、それが圧力になり、過剰緊張の形で出たものと考えられる。また、観察場面以外での、おどけた格好や、乱暴やいたずらなど、統制のできない行動を見ると、これが、圧力との関係という他に、母親に躾けの態度が認められない点より見て、道徳が内面化していない本児自身の問題もあるのではないかと思われる。

<処置及び経過>家庭の物理的環境や父親との関係など、いろいろ問題がありそうで、母親のカウンセリングと子どものセラピーが必要と思われた。

3月末に広い家(89m²)に引越したが、まだその後始末ができないで落ち着かないでいる時に就園を迎える。母親は、引越しと同時に手伝いが来なくなったために、慣れない家事に追われ、疲れが重なっているところに、本児の幼稚園が遠いので送り迎えが大へんになった。そのため、幼稚園生活が始まったばかりなのに遅刻が目立ち、保育場面での落ち着きのなさを担任から注意された。

この頃から、本児に対して遊戯療法、母親に対してカウンセリングを開始した。しかし、遅刻、欠席が多く、計4回で通所不可能となり中断した。この間に母親は、送り迎えが大へんなこと、住まいの近くに友だちができないことを理由に転園させてしまっている。セラピー場面での本児は、観察時と同様、小さくなってしまって自分を表現することが少なく、緊張が見られていた。そして、場面に対する慣れも出てこないうちに中断となってしまったので、以後の経過は不明である。更に、最終回が無断欠席だったため、母親は当所に対して気まずさが

あるらしく、転園以後、また、中断以後の本児の報告は一切なかった。3か月後、担当者の方から母親と連絡をとったところ、子どもは幼稚園生活もとても楽しく過ごしており、友だちもでき、構音障害も全くなくなったという話であった。

<考察>母親の報告を、そのまま正確なものとするならば、家が広くなって部屋数も増えたという環境の改善、また、手伝いがいなくなったために母親が家を明けるわけにいかず、従って子ども達と接触する時間が多くなった。また近くに友達ができたというようなことが本児のフラストレーションを解消することになり、落ち着きがでてきたのであろうと解釈できるわけである。

事例Ⅳ　K・H（男）

観察時年令　5才3カ月。

<家族構成>父（37才）高校卒、木材商。母（36才）中学卒。兄（6才）養護学校幼稚部。その他に使用人や、家事を手伝っている女の子が計4人同居している。

<生育歴>予定日に帝王切開した。生下時体重3,240gで、健康状態には特に異常なし。人工栄養で1才時離乳。身体的発育は順調で、既往症も特になし。

<問題>幼稚園での制作場面などで、他の子どもの行動が非常に気になり、とても自信のないところがあって、自信がないと他の勝手な行動に走ると注意された。知能テストは何回かやっているが、3才4カ月時のI・Q 110、テスト中の態度は大変しっかりしていて、落ち着いているという記録である。3才11カ月にはI・Q・106で、課題にはのるが、あまり積極的でなく、また、考えようとする努力もない。5才2カ月の時、幼稚園で行なった時はI・Q 129、個人法ではあるが、広い部屋で何人かが一緒に行なったため、友だちの方が気になってのぞいたり、体を動かしたりして、とても落ち着きがなかった。

<母親との面接>年子の兄は、I・Q. 60程度の精薄で、脳波異常もあって非常に落ち着きがなく目が離せないので、親はつい兄にかかりきってしまい本児に手をかけられない。また、兄は本児の作った物や描いた絵などにすぐ手を出してこわしたり、汚したりしてしまうが、小さい頃から兄は病気をしたから仕方ないということで、本児には我慢させていた。

<類型仮説>1. 他関心型。根拠：幼稚園からの報告と、当所から出張した際の知能テスト場面で他の子の方が気になって落ち着きがなかったということによる。そして、これは家庭内で兄のめんどうをみることが常に要求されており、また、兄の行為は予測できないので、危険から身を守るためにも兄のようすを常に気にしていなくてはならない状況にあるため、本児はいつも兄(他者)を意識して、それに自分を適応させなければならない。この生活態度が、他関心型となったのではないだろうか。それが習慣となっているために、幼稚園でも他の子に注意が向いてしまって自分のことに集中できないのではないかと考えられる。

2. 自己顕示型。根拠：母親の注意が常に精薄の兄に向くために、家庭以外の場面では相手の注意を自分の方に向けようとするのではないかと考えられる。

<観察実験結果>第1回の時、兄と同室させてみたが、特に落ち着きのない場面は見られず、課題にもよく応じて、結局、仮説の検証はできなかった。そこで、幼稚園でいつも一緒に遊んでいる友だち4人とのグループ観察を2回目に行なった。結果は、とても遠慮がちの反面、遊具の独占などが見られた。みんなが絵を描いていた時、やや隣りの子の絵をのぞき込んだりすることはあったが、観察場面では特に落ち着きがないという感じはなかった。

<処置および経過>観察場面では上記のように、目立った落ち着きなさということは見られなかったが、幼稚園の教師が、本児には親があまり手をかけていないので、そのために安定を失っているのではないかということを心配しているので、心理治療をすることになった。母親は、兄との関係もあってか、この年令の子に対して当然与えておいてよいと思われる知的刺激を、ほとんど与えていないようすであった。（これは、本児の就園前後に、特に著明で、母親としては、兄が遅れているにしても、弟の方が兄を越えて発達していくことに耐えられないという気持があって、本児が字や数などに興味をもち始めても、この子は普通以上の子で、字や数は自然に覚えると思って、それに応えてやらずにいた時期があった。現在は、本児の方がずっと伸びてきていることがはっきりしているために、このような母親の態度はなくなってはいるが、兄に対する程熱心でない感じがする。）心理治療場面での本児は、ものぐさで、すぐ治療者に頼る面がある。絵など、最後まで描き終えることができないし、また、玩具の持続時間が短かい。自分が欲しい物があっても、自分は動かずに治療者に持って来てといったり、自分の代りに何かしておいてくれと、しつこく頼んだりする。当所で心理治療を始めて7カ月程後、幼稚園から、大分落ち着いてきたという報告があった。尚、心理治療は現在も継続中である。

<考察>仮説として挙げた、他関心型、自己顕示型の2つの型は、ここでの観察実験場面で、いずれも検証す

ることができなかった。しかし、本児に対して、心理治療を行ない、幼稚園の教師や母親と連絡をとりながら経過を見てくると、次のようなことが考えられる。兄が元の養護学校に通っていた時は、本児の幼稚園も同方向を選んで、母親が一緒に送り迎えをしていたが、この4月から、兄は家の近くの養護学校に入学することができた。そのため、母親の送り迎えは、本児の幼稚園のみに限られ、母親が本児だけにかかわる時間ができてくるようになって、大分、愛情の点で満足してきたようである。それが幼稚園で落ち着きがみられるようになったことの原因であろうと考えられる。また、母親ので話は、本児が学令になったら、本児だけの鍵のかかる勉強部屋を設けてやって、兄に邪魔されなくて済むような環境を作ってやりたいということである。このような、本児をとり巻く環境の変化と、それに伴う本児見身の変化を考えると、本児に落ち着きがなかったことの原因は、自分を認めてほしい、自分に注意を向けてほしいというニードが満たされていなかったことではないかと思われる。従って、これは類型仮説で挙げた自己顕示型というよりも、関心要求型と解釈してよいのではないか。また、他関心型に関しては立証の根拠はないか、幼稚園場面で現実に見られていたことであるために、否定もできないという意味で、一応この2つを本ケースの落ち着きのなさの型と解釈した。

事例Ⅴ　K・T（男）

観察時年令　5才4カ月

<家族構成>父（31才）中学卒、バー経営、母(29才)中学卒、バー経営

<生育歴>予定日より1週間遅い正常分娩。生下時体重2,850ｇで、健康状態に異常なし。栄養は、初めの1か月は母乳が出たが、あとは1才6か月の離乳時まで人工栄養であった。身体発育は順調で、既往症もない。

<問題>幼稚園で集団から外れてしまい、また性格がとても摑みにくいので相談してみた方がよいというので、母親と幼稚園の教師と共に来所した。この時行なった知能テストの結果は、I・Q．86で、態度はとても落ち着きなく、始終体を動かしているし、課題の理解が悪く、何度も問いを聞き返すという記録である。

<母親との面接>（初回来所時の幼稚園の教師の報告も含む）両親の職業が、バー経営ということにはなっているが、実際には殆ど母親がやっている。そのため、夜も母親は家にいることが少なく、その間は父親が本児のめんどうを見ている。父親は甘い方であり、ほとんど外へ出すことが無く、ひとり遊びが多かった。家でのひとり遊びを見ていると、特に問題はないと思っていたが、幼稚園に入ってから、他の子ども達の中に入ることができず、初めの1週間は母親がついていないといけない程で、その隔りにびっくりしたということである。絵など描かせようとすると飽きっぽく、また、全く関係のないことを聞いたり、同じことを繰り返し聞いたりする。幼稚園では、リトミックや遊戯など、体を動かすことはするが、紙芝居をみたり、絵を描いたりということは、なかなかしない。教師が1人付ききると描くこともある。1人で教師を独占し満足したいからなのか、それとも教師に付ききられることが圧力となるからなのかは疑問である。また、集団行動がとれないばかりでなく、自分の好きなことをしていると、固執性が強いために呼んでもなかなか次のことに移れない。描画など、集団の中で1人1人が何か制作するというようなことができないかと思われる反面、友だちの胸についている名札を読んで歩いたりして、知的な面を見せることもある。

母親は、仕事で忙しくしているわりに、子どものことをよく摑み、めんどうもよく見ている様子である。

<類型仮説>1．関心要求型。根拠：幼稚園での制作場面で、教師が1人つききるとみんなと同じようにできる。また、友だちの名札を読んで歩くということは、字を読むことが賞賛につながるという認識があって、そのために教師の関心をひこうとしているのではないかと考える。2．圧力型。根拠：教師がつくと嫌いな絵も描くということは、それが圧力となるためではないか。3．能力課題の不一致型。根拠：幼稚園で、何でも集団から外れてしまうかというとそうでもなく、リトミックや遊戯などの体を動かすことはするということから考えた。

<実験観察結果>マイペースで遊んでいる。実験者が質問することになかなか答が返ってこない。自分が熱中して遊んでいることに関しての質問があっても、必ずしも応じないで、また、本を読んでみようとか、絵を描こうかなど課題を与えようとすると、すぐ逃げようとする態度があり、非常にのりにくい。また一方、ひとり遊びをしつつも、適当に相手になってほしいというようすが見られ、実験者が背景に退いた時点から急に体の動きが多くなり、実験者の注意を自分の方に向けようとするために、自発語が多くなったり、「おじさんお仕事まだ終らないの」など直接話しかけが目立った。しかし、ある程度試みた結果受け容れられないとみると、またひとり遊びに戻った。このような状態から、相手の関心をひきたい気持の強いことは認められたが、それにもかかわらず再び実験者が接触をもち始め、要求を出しても、これにはやはり応じなかった。途中から母親を同室させ、

更に母親と本児の2人だけにさせてみたところ、実験者に要求されても読まなかった本を読むことができた。母親は、自分に学歴がないということが背景にあるためか、狭い意味での教育意識が高い感じを受ける。このために、本児に対して期待過剰があり、字などを教えこんだのではないかと思われる。これが本児にとって圧力になっていると考えられる。以上の行動特徴より関心要求型が妥当と思われる。

また、能力課題の不一致型に関しての手がかりは見あたらず、特に重要なポイントとも考えられないので、ここでは省くことにした。

<処置および経過>子どもが無視され、基本的欲求が十分満たされていない。母親は夕方からいなくなり、父親が世話をしている。父親は甘い方だが無責任で、子どもを近くの祖母に預けて遊びに行ったりする。

以上の結果から、環境調整が必要と思われ、できれば定期的な通所を勧めたいところであったが、母親が妊娠していたため不可能であった。しかし、本児に対する圧力が大きいことを感じたので、それを少なくするためになるべく本児と一緒に遊んでやりながら接触を多くもつよう指導した。同時に、幼稚園に対しても、本児が集団の中に入ってこないからといって好きなことばかりさせていないよう、なるべくみんなの中に入れる機会を多くするよう、扱い上のアドバイスを与えた。すなわち、本児をしかたのない子だと度外視せずに扱うようにという意味である。

母親が仕事に出ているという環境のため、どうしても本児に接触する時間が少なく、このために愛情不満もかなりあると考えられていたところ、母親は妊娠を機会に店に出るのを止め、自然に本児との関係が多くなり、環境が好転した。3カ月足らずの間に母親と子どもを3回来所させ、母親には前に述べたようなガイダンスを含みつつカウンセリングを、同時に子どもにはプレイセラピーを行なった。その中で、我々が予想していたような、本児に字を教えこもうとか、絵を無理に描かせたり、それを評価したりとかいうことは、母親は全くしたことがないということであった。従って、圧力があったことは否定されたわけである。それよりも、母親が仕事を止めて家にいるようになったことが何よりも大きなプラスになったらしく、セラピー場面での本児はとても楽しそうで、幼稚園生活にも進歩がみられた。母親が女児を出産し、落ち着いたようすなので、5か月程後、再び来所させたところ、母親は自分が店に出なくなってから父親が張り切ってやる気をおこし、更に新しい仕事も持ちたいといっていることを、不安を抱きながらも喜んでいるようすであった。また、子どもの方も、全く問題に思うことはなくなっているということである。

<考察>このような経過をみてくると、本児の場合の問題は、母親の愛情不足ということが大きな問題の根底にあったと考えられる。これが、母親が出産を機に家に入ったという生活環境の変化によって、自然と満たされたのであろう。

事例Ⅵ　S・H（男）

観察時年令　4才2カ月

<家族構成>父（40才）大学卒、会社員。母（33才）中学卒、無職、異母姉（12才）区立小学校6年。

<生育歴>予定日より1週間早い、正常分娩、生下時体重3,330g、人工栄養で、1才時に離乳。ミルクをよく吐いた。身体的発育は順調で、扁桃腺肥大があり風邪をひきやすいが、特に既往症はない。

<問題>落ち着きがない。興味のあることにはよく答えるが、そうでないと、とぼけてしまって、幼稚園の入園テストでも、そのために落ちた程である。指しゃぶりがある、ということを主訴として来所した。この時（4才1カ月）行なった知能テストの結果はI.Q.86＋αである。落ち着きがなく部屋の中を歩き廻ったり、いい加減な答えをしたりし、課題意識もなくて勝手なことをした。途中から母親が同室すると、よけいふざけて、わざといい加減な答をするが、もう少しできると思われる、という検査者の評価である。

<母親との面接>姉が小学校入学前、姉の実母が病死し、父が本児の母と再婚したので、姉は本児の異母姉ということになるが、本児との関係はごく普通である。しかし、本児が生まれるまでは1人っ子で育ったためと、姉自身、非常に情緒的に幼ないので、本児の面倒をみたということは殆どなく、特に可愛がったりもせず、却ってからかったりする。父親は、昔、自分が世話になったからと、親類をとても大事にする人で、親戚の客が来たりすると、その接待が大へんである。しかも、その親類の出入りが頻ぱんであり、そんな時母親は、客の手前、笑われますよという形で本児に注意することが多い。家もさほど広くないのに、泊り客が多く、来客中は子ども達に無理をさせることも多くなってしまう。父親は、普段は何もいわないが、叱る時は厳しい。

禁止はよく理解するが、人の顔色を見ながらしたりする。また、女の人に照れるところがあり、自分に注意が向けられているなと思ったりすると、アカンベエをする。

自分で覚えたいものは、一生けんめい聞いて覚える。

字はカルタで全部覚えたし、数字も書ける。また、時計を分刻みで覚えたり、自動車の種類もいえたりする。こんなわけで、母親は優秀な子どもだと思っていたのに、知能テストの結果が、さ程高くなかったことがとても意外だということである。また、親戚の結婚式に連れていったことがあるが、坐っていられなかったり、姉の小学校に参観日などで連れていっても、なかなかじっとしていなかったり、ということはあったが、母親は本児のテストを受ける際、同室し、これはきっと、本児が女の人に照れるところがあり、たまたま検査者が女だったのでひどかったのだろうと思う、ということを述べている。

<類型仮説>1. 失敗不安型。根拠：テストの際、課題意識がなく、わざといい加減な答をしたりして、逃げる態度が見られたため。2. 自己顕示型。根拠：女の人の前だと照れて、わざとふざけたりするというところから。

<観察実験結果>プレイ・ルームの中に用意してあった玩具に次々と手を出し、ちょっと遊んでは、すぐ他に興味が移る。実験者が与える課題に対しては、興味のないことだと、かなりしつこく要求しないと応じない。また、うまくできないと途中ですぐやめてしまう。ただ、車を手で押すような、単純な遊びに限っては、かなり長い時間、同じ遊びが続いた。また、興味のあることであれば、何かに熱中している時でも応じることがある。課題の難易でいうと、本児に十分理解でき、答えられるようなことだと、興味が他に行きかけた時でも、声をかけて励ましたりすると戻ることができるが、ちょっと難かしい課題だと拒否して、なかなか応じない。こんな所から、やや失敗不安型を肯定できそうである。更に、実験者が背景に退いた場面で、特に変化が見られなかったところから、自己顕示型という仮説は否定される。

<処置及び経過>知能テストの場面、及び観察場面で母が同室した際などで、母親が口出しをすることが非常に多いことが目立った。母は自分が二度目の妻であること、自分が中学卒であることなどから、子どもを育てる態度として、気負いのようなものがあったと思われる。それが一層、子どもにとっての圧力になっていたのではないか。また、字や数など子どもの方から興味をもってどんどん覚えたという報告ではあるが、その割に失敗不安的な、課題から逃げようとするようなところが見られたということ、また、本児に挨拶などを何回も強制することなどから、やはり母親の圧力があったからではないかと思われた。そこで、母親も希望したので、子どもの遊戯療法と母親のカウンセリングを行なうことになった。カウンセリングが進むにつれて、母親の教育に対する気負いのようなものは、だんだん除かれてきたらしく、少々自分の思い通りに子どもがしないことがあっても、前程口うるさく言ったりすることは少なくなって、子どもをありのままに見ることができるようになった。子どもの方は、表情に変化がなく、小さな声で独言をいったりすることが多かったのが、表情も出てきて、セラピストとの関係をもちつつ楽しく遊ぶことができるようになった。そのうちに、家が引越すことになり、部屋数の多い家に移ったために、客が多く、子どもにシワ寄せが来ていたような生活も、自然に改善されて、客が来ても、子どもは子どもで別の部屋にいることができて客との関係も少なくなったり、別室で早く寝かせることができるようになった。そして引越しと同時に、家の近くの幼稚園に入ることができ、時々列から外れるようなことはあっても、名前を呼ばれると戻って来て、大体みんなについて行っているということである。幼稚園の担任も、本児のことをよく理解してくれ、この程度のお子さんだったら何も特別なこと（心理治療）をしなくても、十分保育できるといってくれたので、4回で治療を終結した。終結後、4才7カ月の時に、再びテストをしたところ、落ち着きなく、椅子にキチンと坐っていることはできなかったが、ある程度の課題意識はあって、I.Q. 120という結果が出た。

<考察>母親が後妻で、しかも教育がないために、親類その他に子どもの能力や性格について、後妻だから、あるいは、学歴がないから子どもがよくできないとか、性格がよくないあるいは躾けができていないと批判や非難されはしないかという不安が強い。その結果として子どもの行動に強い圧迫を加えて躾けて来たように見える。この圧力が、子どもの失敗不安型の落ちつきのなさの大きな原因と考えられる。家庭の物理的環境、すなわち、家の狭さと来客の多いことが母親のあせりを助長している。もともと穏やかさのある人なので、カウンセリングの結果も早く表われたと考えられる。それに引越しという物理的環境の変化もあり、母親の子どもに対する圧迫、強制、干渉を減らすという良い方に効果的であったと考えられる。

事例Ⅶ　E・H（男）

観察時年令　6才1カ月。

<家族構成>父（36才）高校卒、会社員。母（37才）高校卒。

<生育歴>予定日通りに生まれたが、非常に難産で、鉗子分娩であったが、回転異常があり、鉗子が目の下にひっかかった。生下時体重は3,100gであったが、子ど

ももとても弱く、生後5日目と10日目に呼吸困難になった。この2度目の時は発熱もし、消化不良が併発したために、2カ月間入院した。その後も、9カ月目に気管支炎になって熱が下がらなかったために10日間入院したり1才の時にはシェーカーのふたを喉につまらせて傷をつくり、1週間入院したりした。お腹をよくこわしたり、自家中毒も時々起こしたりする。身体的発育は、大体標準通りである。出産時にいろいろな障害があったので脳波検査をしたところ、結果に異常はなかった。

<問題>心理治療中の子どもであるが、落ち着きのない行動がひどいので、ここで特に問題とした。

当所には、落ち着きがない、はしゃぎ出すとブレーキがきかない、オナニーがひどい、おとなを笑わせたり、びっくりさせたりするのが面白くてわざと嘘を言ったり、下品なことを言ったりする、幼稚園でも、わがままな行動が多く、集団行動がとれず、絵も描けなかったりするので、知能の発達がおくれているのではないかと思われ、特殊学級の方が良いだろうと言われた、などの様々な主訴をもって、4才6か月から半年程の間に3度、相談に来た。そして、その都度、知能テストを受けているが、コンスタントに90代のI.Q.が出ている。行動は、そのたびに、大げさな言動が目立ったり、はしゃいだり、落ち着きがなかったり、ということが記録されている。その後転園したが、問題行動がいつまでも良くならないし、母親にも少なからず問題があったので、子どもに対して遊戯療法、それと併行して母親のカウンセリングを行なうことになった。本児は、治療場面でも、落ち着きなくしょっ中動き廻り、水いじり、砂いじり、その他小さな玩具を集めてはパーッと投げて遊ぶなどの遊びが多く、また、オナニーも目立った。そして、治療者の顔色や反応を見ながら興味をひくようなことをする状態が続いたので、一度観察してみようということになった。

<母親との面接>生育歴からもわかるように、本児は小さい頃から体が弱かったために、母親は大事に大事に育てて来た。そして、本児の色々な目立った行動を恥かしいとは思いながらも、はっきりと叱ることができない感じで、まるで、自分の子どもを扱うのに、腹は立ちながらもビクビクした感じがある。しかし、根本的には、子どもを拒否していて、ほんとうに可愛がっている感じはない。従って、子どもとぴったりくっついている感じを全く与えない。また、母親の、夫との関係もとても悪いらしく、夫に対する不信感やら、意地悪さなどを、ジメジメした感じで表現する。一般に、母親の人間関係のもち方が未成熟で、そのために関係を悪くしていると言える。

本児は、子どもと一緒に遊ばせようとしても遊ばず、おとなとの関係が好きなようである。幼稚園では、ふざけてばっかりいるが、子ども達と一緒になってではなく自己中心的に、周囲の反応をみながら、という状態である。相手を見ることはうまく、母親の長兄が厳しい人で、その人の前では、とてもキチンとしていることができる。私立小学校に入学したが、初めは授業中に勝手なことを話したりして目立った行動を示していた。

<類型仮説>1.　自己顕示型。根拠：しょっ中フラついて手をかける。幼稚園や小学校でも、知能テストの場面でも、セラピー場面でも、常に人の注意をひくようなことを言ったり、わざとおかしな格好をしたりして、相手の反応をみてばかりいる。

<観察実験結果>喜んで入室し、一貫して実験者の注意をひこうとする態度があって、突拍子もないことを言って、「ネェ、おかしい？」「びっくりした？」などと確かめる。また、「ママは嫌い、おこるから。ボクのママみたいじゃない、よそのおばさんみたい」「ママなんて嫌いだな、先生がいいな、先生って王子さまみたい」などと言っては、母親に対する攻撃を示し、自分に構ってくれている実験者に極端な好意を示す。課題に対しては、逃げようとしながらも、実験者から拒否されるのを嫌うかのように、し方なく応じている感じである。

観察実験の結果から、仮説通り、自己顕示型を疑うことなく認めることができた。

<処置および経過>観察前からひき続いて、子どもの遊戯療法と母親のカウンセリングを行なっている。母親は、子どもの劣等性は認めるが、その原因を外に求める。そして、先生がもう少し目をかけてくれれば、友人が仲よくしてくれればもう少し良くなるのだと、その主な原因を他人に求めようとする。即ち、外罰的で、自分の正当性を主張するところがある。また、この母親のパーソナリティは変わっていて、子どもに対して否定的であるばかりでなく、他人に対しても否定的で、悪口をいう事は平気である。そして、人のことを肯定することに抵抗を感ずるような人であった。自分は完べきだと思っているためか、感情やら不満を生のままにぶつけてしまう。父親に対しては感情を素直に表現できないし、また要求や依頼も上手でなく、それでいて相手に対する要求は多いので、父親との関係は勿論、他の人との人間関係はとても悪い。しかし、本児が小学校に入学し、実際問題として他人に迷惑をかけたり、心配をかけたりすることが多くなってくると共に、学校がこの問題の子をよく受容してくれる現実に接して、自分勝手な、外罰的なこ

とばかりいっていられなくなり、少しずつ、自分の態度に反省が見られ出し、人間関係の持ち方の上に洞察ができ始めて来たようである。本児の学校は、私立で、1学年1クラスという小じんまりした学校なので、教師達も自分の学年ばかりでなく全体を摑んでいるようである。そのために、学校での、本児に対する態度が一貫して受容的で、それが母親と同様、人間関係の中で素直さのない本児にとって非常にプラスになり、大分安定して、落ち着いてきている。また、I.Q.90代であるが、学校の勉強には大体ついて行くことができ、計算などは確実に早くできる。情緒が安定してきたら、もっと高いI.Q.が出るのではないかと思われる。

<考察>本児がここまで、他人の顔色をうかがいつつ、尚、他人の注意を自分に向けようとする必要性をもっている背景には、やはり母親の本児に対する消極的拒否の態度、その背景にある夫婦関係の悪さというものが考えられる。徐々に良い方向に進歩すべく、遊戯療法とカウンセリングの必要を感じ、継続して行なった。その結果、本児の小学校における問題行動は大体解決し、また、学校の成績は中以上になり、母親は本児の好転と共に、すべての点で否定的傾向を示さなくなり、この子も大丈夫な子どもであるという自信を示し、「学校の先生がこの子に目をかけて下さっている」と素直に人の好意を受けとれるようになって来た。

事例Ⅷ　M・Y（女）

観察時年令　8才9ヵ月（私立小学校2年）

<家族構成>父（38才）大学中退、会社経営。母（33才）高校卒。兄（10才）私立小学校5年。

<生育歴>予定日より2週間遅れたが、正常分娩で、生下時体重3,460g、健康状態にも特に異常なく、その後の発育も順調であった。栄養は、生後3ヵ月間は母乳で以後ミルクに変わり、10ヵ月で離乳が完了した。

<問題>学業成績が悪く、授業中注意散漫である。そろそろ3学年に進級するに当たり、学校で教研式の知能テストをしたところ、S.D. 68と出て、48人中6番だった。学校の方としては、私立小学校のため、ふだんの成績、態度がよくないので進級をどうしたものかと思っていた矢先のことなので、びっくりし、当所でよく相談してきてほしいということであった。この時（8才8ヵ月）行なった当所での知能テストの結果は、I.Q. 92で、テスト中の態度は、やや緊張していて声が小さい。自信がないと黙ってしまう、言語表現がうまくできないなどという記録である。2才4ヵ月の時、当所でテストを行なっているが、この結果は乳幼児検査でD.Q.100また、3才の時に再びテストを受けに来ており、この時はI.Q.130、態度もとても良く評価されている。

<母親との面接>家でも落ち着きないと感ずる。テレビを観ながら食事をすると、テレビの方ばかりに気をとられて、食事が全くできなくなる。体を動かすのが好きで、学校でも体育を喜ぶ。遊びも、ローラースケートなどが好きで、予定していたのに行かれなかったりすると、わざと字をきたなく書いたりする。勉強では、算数の計算がのろくてできない。また、ちょっと援助してやるとできる問題が多いようである。学校の先生はこわい自分にだけ強く言う、というが、学校には喜んで行き、友達関係はよく、楽しく遊んでいるようである。幼稚園時代はリーダー格だった。

父親は甘く、母親が本児を叱ったりすると、可哀そうだと慰め、母親には、叱ってはいけないという。本児は兄を尊敬し、関係も良い。

面接者から見ると、母親は非常におっとりと、のんびり構えている感じである。また、学校から当所への来所を勧められ、その際に本児の問題も話されていながら、あまりあわてた風はなく、当所での結果によって進学させてもらえるか、それとも同系の少し低いレベルの学校に転校させられるかが決まるのだろうということも解っていながら楽観的であった。こんな点から考えて、母親は、私立だから、入学試験に合格しさえすれば途中で出されるようなことはないだろうと思って暢気に構え、学校の勉強をあまり見てやっていなかったのではないかと思われた。また、今回のテストではI.Q.100を切っているが、学校でのテストの結果、また、3才時のテストの結果のことも気になったので、今回だけの結果をそのまま学校の方に報告することはためらわれた。そこで、学校へは保留にしてもらうよう頼み、WISC知能診断検査を施行した。結果、言語検査のI.Q.は114、動作検査は125で全検査としてみると、123ということであった。検査には非常に熱心にとり組んだが、ことばの理解にかなりムラがあったという、検査者の観察である。

<類型仮説>能力（学力）と課題の不一致型。本児は知的素質はわるくないが、学校が学業水準の比較的高い学校であるのに、母親は楽観的で、学業に比較的無関心で放任していたために、学業不振に陥り、学校の課題と本児の能力の差が著しくなりすぎて課題を十分理解できず、落ち着きがなくなったと考えられる。

<観察実験結果>緊張していた。姿勢が良く、与えられた課題にも熱心にとりくみ、全く落ちつきがないようすは見られなかった。場面になれてき、緊張がとけて来ても、姿勢の良さや課題に対する態度に変化は見られな

かった。しかし、熱心ではあるが、勉強不足の感じで、文字の読みなどが悪いのや計算の遅さが目立ったので、我々の推定した能力（学力）と課題の不一致型が支持された。

<処置及び経過>知的に低いわけではないのに、勉強不足で、それが大きなマイナスとなっているようであった。そのため、良い家庭教師をつけることが良策と考えられ、これに対しては母親も非常に乗り気で、是非そうするということになり、早速、経験豊かな男の教師につくことができた。本児が教師の自宅に通う、という形をとり、母親が送り迎えをした。本児はとても楽しんで勉強に通い、２～３カ月で、もう効果が表われ、算数の成績がグンと良く、評価５となって、両親や学校の教師を安心させることができた。

<考察>

我々が接する限りにおいては、一体、この子のどこが落ち着きがないというのだろうかと疑問に思うような時でも、学校では確かに落ち着かない子だと評価される場合があるのだということが、このケースを扱ってみて実感された。また、情緒的な問題、家庭的な問題がなくても、程度の高い私立校のため、単なる勉強不足ということが学業不振を招き、そのため授業が面白くなくて注意散漫になり、教師から見て「落ち着きのない子」と評価されることがあるのだということをこのケースから学んだ。

普通の「能力課題の不一致型」は、素質的能力と課題の程度との関係が問題であるがこの場合は素質的能力ではなしに、学業が問題となったので、「能力課題の不一致型」の一変型である。